



子育ての極意はあるの？

・いまの子どもたちは習い事が多くて忙しいとよく聞きます。親の出費も多いようです。多くの親は、自分は子どもを大切にしている。教育に熱心だと思っているでしょう。無理をして出費をしている親ならば、余計に「こんなに手をかけている」という気持ちをもつかもかもしれません。ただ、そこに少し勘違いがあるのではないかと思います。そのようにあれこれ習わせることで、子どもが良い方向に育っていくというのは、一種の幻想ではないでしょうか。あれこれ手をかければかけるほど、子どもにプラスになるなどというのは勘違いの典型です。乱暴に言ってしまうと、子育てにあたって親が気を使うべきは、子どもを危ない目に遭わせないこと、食事をちゃんと与えること、そのぐらいでしょう。

・子どもには子どもの人生があり、その毎日がとても大切なものだと考える。これが子どもを大切に基本なのではないでしょうか。

・私は昔から人を育てようと思ったことはありません。勝手に育つだろう、と。わが子に対して、成長を期待して何かしたおぼえがない。あえて言えば、自然と何かするように仕向けることを考えたくらいでしょう。自分がこれだけ手をかけたからいい子になった、賢い子になったと親は思いたい。教育関係者も思いたい。塾その他は最初からそう謳っている。何でもコントロールできているから、子どもに対してそう思うってしまう。でも子どももまた自然のものでありますから、基本的には勝手に育つ。その視点を忘れてはならないのです。子どもについて言えば、好きに遊ばせるに限ります。野山をかけめぐらせればいい。これはずっと持論のように言い続けていることです。子どもに限らず、自然、花鳥風月に接するのはいいことです。自然のものを毎日十分も見れば頭が良くなる、などという言い方で勧めていたこともあります。

「人生の壁」 養老孟司著 新潮新書

著者の養老先生については、知っておられる方も多いでしょう、著名な解剖学者です。こどもの時は山で虫取りをすることが好きな、そんな少年だったそうです。そんな養老先生流の子育てに関する考え方が伺えます。



「これだけ手をかけたのでいい子になった、賢い子になった」という気持ちを親である私たちは思いたいものですが、こどもは、なかなか思うようにはならないものです。養老先生は、「子どもには子どもの人生がある」ということをおっしゃいます。おそらく、私たち親は、そのことは分かっていますがなかなか割り切れません。養老先生は、親がこどもを自分の思うように育てようとするのは間違いで、それによってこども一人ひとりが持っている「良さ」が殺されてしまうと言っておられるのです。

書店には、子育てに関する本がたくさんあります。「〇〇すれば、良い子に育つ」「〇〇すれば、こどもは賢い子に育つ」などと書かれた本があったりして、読者は、その中にこどものより良い将来を見出し、子育てのよりどころにしようとします。特に、初めての子であれば、子育てに不安を感じるのは当然です。子育ての専門書を読んで一つの参考にすることはいいことですが、気を付けておきたいことは「子育てに極意はない」ということです。子育てにとって、大切なことは、「こどもを信頼し、こどもへ寄り添う」ことなのだと思います。